広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	忍耐における苦痛の意味と意義 : 苦痛の価値論
Author(s)	近藤, 良樹
Citation	HABITUS , 22 : 3 - 18
Issue Date	2018-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/45621
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045621
Right	
Relation	

忍耐における苦痛の意味と意義

－苦痛の価値論－

近　藤　良　樹

（広島大学名誉教授）

1．苦痛とは何か

（忍耐での苦痛の定義）苦痛（辛苦や苦悩なども含んだ苦痛感情）は、損傷（傷み）への放置しがたい不快感情（痛み）である。忍耐では、この損傷と苦痛を回避せず耐え、時間とともに明らかになる耐えがたいものを苦痛において際立たせる。抑鬱、焦燥が顕著になるだろうし、長い苦痛には、徒（いたずら）に蹠（あが）き、悶え、やけになって当り散らすこともあろう。さしあたり次のように（忍耐のもとでの）苦痛は定義できよう。

苦痛（辛苦）は、身体や精神に生じた損傷（傷み）への放置しがたい不快感情（痛み）である。生の防護感情として苦痛は、損傷を前に、緊張、拒否・嫌悪を生じ、萎縮、抑鬱状態となり、不安、焦燥、虚脱等の反応を見せる。さらに、徒に蹠き悶えて疲弊を招来もする。

（感情としての苦痛）苦痛感情は、感情一般がそうであるように、その対象の価値づけ（解釈）と、それへの心身の反応をもつ。怒りの感情なら気障りという解釈をして、これに攻撃的反応をする。苦痛感情では、一方に損傷を被っているとの知覚・解釈をもつ。手への苦痛は、手において損傷の感覚（触覚や温度感覚ではなく、損傷と捉えての痛覚刺激）をもつ。これに個我の私が心身全体で緊張等の生防護の反応をして苦痛感情となる。

損傷（傷み）に苦痛（痛み）をもつのが原則だが、損傷があっても苦痛（感覚・

感情)がともなわないこともある。内臓の損傷にはあまり苦痛を感じない。おそらく、苦痛で内臓の損傷を知っても、自身ではどうすることもできず無意味な苦痛になるから、痛みの末梢神経は内臓では発達していないのであろう。逆に苦痛(感情)はあっても損傷の見つからないこともある。生理的なものでは、末梢神経か脳中枢の誤作動という扱いになる。精神的苦痛は、社会生活での損傷・喪失で生じるが、これも、そういう損傷(失職とか失恋)がないのに、脳内のみで異常な病的反応をして不安や抑鬱・悲哀の苦痛をもたらすこともある。しかし、いずれにしても生じた苦痛は、危機的な状態にあるという反応をもち、逃走的になったり拒否的な姿勢を持続させる。

(価値論から捉えた苦痛)苦痛は、その意義、価値論の方からも捉えられる。価値は、これに関わる者の求めを充たし資するもののあることであろう。猟犬は、猟師にとり、猟に資するもので、猟補助の求めを充たすという価値をもつ。かつ、近所の者には、獰猛な犬として嫌悪・排斥に値する反欲求の対象で、反価値となる。価値・反価値ということでは、苦痛は、嫌悪され排撃される反欲求の代表といってもよく根本的には反価値である。だが、痛みで重病が発見されるのであれば、その苦痛は、診断、情報の価値をもつ。価値論の方面からみての苦痛の意義は、つぎのようにこれをまとめておけるのではないかと思う。

苦痛は、生にとり嫌悪すべき根源的な反価値であるが、意識を刺激し覚醒させる覚醒価値となり、損傷への情報、警告・保護、注目強要等の価値をもつ。さらに苦痛は、ときに快を際立たせたり湧出もする。苦痛忍耐の方から見ると、甘受される苦痛は、目的実現へと駆り立てて価値創造のための手段価値となり、ひとを鍛えて能力開発を行う価値になる。苦痛をあえて受け入れる自然超越の姿は、ひとの卓越した自由を示し、苦痛は、人間的尊厳を証するための価値ともなる。

2．苦痛の諸相

(苦痛の質的量的な諸区別)苦痛は、この世に満ち満ちていて、ひとの生のあらゆる層(生理的レベルから心理的なもの精神的なものの層まで)とそのうちでの諸対応・振る舞い(怒りとか不安とか恐怖とか)に応じて、各々に固有の異なった苦痛様態をしめす。別離の悲痛と、味覚の酸味の苦痛は、まるでちがう。個人差も大きい。損傷を被ることがまずあっての苦痛だが、損傷と受け取るかどうかは、個体毎に相当ちがう。禿頭は、これを大きな欠損とうけとり苦痛に思う者もいるし、些細な不足とし若干不満とするだけの者もいる。しかし、それらは大きく異なっても、同じく生の(大小の)損傷との解釈をもち、これを嫌悪し拒否的に心身が反応するのは同一であり、苦痛感情のうちのこととなる。

(不快と苦痛)感情は、快不快に二大別される。快でないものは、感情としては、不快ということになる。快苦(pleasure and pain)と言われる場合は、不快は苦(苦痛)と同一視されているのであろう。生の促進・保護のなる状態にいだくのが快や楽であり、生を妨害・侵害し否定する状態にもつ感情が不快であり苦(苦痛)である。

苦痛と不快は、区別もされる。「学校は苦痛」というときは、嫌悪し拒絶したい学校で、その苦痛を解消するために、登校拒否にも進むような強烈なものになろう。「学校は不快」というのは、欲求不満があって楽しめない状態だけれども、拒絶・排撃的な「苦痛」までにはなっていない状態であろう。

感情を「快不快」に大別するときのその不快ということなら、快でないあらゆる状態をさす。「快か不快かで答えよ」と言われれば、軽い苦痛をさすのはもちろん、辛い苦悩も不快のうちに含ませることになろう。「快苦」という場合は、理念・典型の「快」楽と「苦」痛があって、その二極の間、あるいはその周辺に全感情が位置付けられるというイメージを描けばよいのであろう。

(痛い、苦しい、辛い)「痛い」という場合、足とか腰といった身体の特定部位

での痛みの感覚をもち、これを踏まえての私(主体)の緊張とか拒否の苦痛反応になるのが基本であろう。「痛み」は、精神的社会的な場面でも言い、ときには和語として「苦痛」の代役もつとめるが、身体的な痛みがその基軸を担うものであろう。「苦しい」は、「生活が苦しい」「寝苦しい」というような場合、私の欲求や意志が思い通りにならない、意のままにならないという嫌悪・焦燥等の苦痛反応になる。苦しさは、生理的なものにもいうが、それは、「息苦しさ」のように、身体の部位が特定されないで、私の欲求の抑止されることの不快・苦痛が表にでるので「苦しい」と表現するのであろう。痛みは、損傷の部位が感じて私が防御・拒否の反応をするもので、苦しみは、私の欲求や意志を抑制することが強いられての拒否的抑鬱的反応になろう。尿意の「苦痛」では、「痛み」は、尿道という部位での感覚的なものに言い、その「苦しさ」は、尿意を抑えて抑えがたいその衝動と意志主体の葛藤、煩悶・焦燥の状態に言う。

「辛さ」は、痛み・苦しさ両方にいい、耐えがたいような苦・痛になっていう。苦・痛の極限まで意志が耐えて苦悩するようなところで「つらい」という。「痛み」「苦しさ」の奥に「辛さ」がある。「痛んで、辛い」「苦しくて、辛い」と、「辛さ」は、痛み苦しむことに一歩距離をおき反省的である。距離をおくというより、苦・痛から自分の内奥へ、あるいは総括的な理性意志へとひきさがるのであり、追いつめられてぎりぎりになったその意志主体の発する感情であろうか。辛さは、苦痛の極限状態、後がない状態に敗退も思い、悲しみの契機をもつものでもあろう。

「苦痛」は、苦しみ・痛みを含めて包括的に、強い不快感情を代表できるであろうが、辛さ・苦しさの「辛苦」の場合、息を止めておく苦しさ・辛さがあっても、それを「辛苦」とは言わない。「辛」の漢字は、針の象形で、「まま子に「辛く」あたる」というように冷酷無情の意味があり、そういうことがあってか、「辛苦」には、社会的精神的な生の苦痛が強く感じられる。

3．苦痛の価値論Ⅰ－反価値の苦痛のもつ価値

(反価値(損傷)を知らせる、価値ある苦痛)苦痛は、拒否・嫌悪され反欲求対象の代表で、価値が無いどころかマイナスのもの、反価値である。だが、その苦痛の(排除したいものとしての)反価値は、同時に、これに対処する構えをもつとき、(ひとの求めを充たすものとなって)価値になりうる。痛みが生じるということは、そこになんらかの損傷の危機が生じていることを示す。苦痛は、損傷を知らせる「情報価値」をもつことになる。病院にいくのは、痛みが気になるからで、治療者もまずは苦痛を問う。苦痛は、診断的な価値をもつ。苦痛があるから損傷に火急の対応ができ、生が保護されるということなら、苦痛は、「生保護の価値」をもつのでもある。あるいは、痛い目にあったら二度目は警戒し、損傷する前に逃げることが可能となれば、「予防・警告価値」ももつ。

(苦痛は、二重に苦しめる反価値となるが…)末期がんの痛みは、疾病の診断的情報価値などと悠長な事は言っておれない。苦痛自体が「疾病」としてひとを悩ませるものであろう。癌でひとをどん底におとしこめて痛めるだけでなく、とどめを刺そうとばかりに激痛を生じつづけ、いためつづける。こういう苦痛・苦悩は、身も心も徹底して傷めつけるだけの、言ってみれば悪魔の所業である。普通の苦痛の場合も、損傷を受けて打撃・損害にへこんでいるのに、そのうえに苦痛をもっていたぶり疲労困憊させる。苦痛は、「傷口に塩をぬる」もので、二重に苦しめるのかと言いたくもなる。

この徹底して反価値のみとなる苦痛も、他人には、価値となりうる。敵対的な間では、敵が苦しむことを快(価値)とする。敵に損傷と苦痛を与えて溜飲を下げる。古典的な拷問では、できるだけ損傷なしに激痛のみを与える工夫もする。激痛ほどに価値あることとなる。

(苦痛は、損傷への注目を強いる、強要の価値をもつ)苦痛は、しつこく続く。しかし、それだからこそ、損傷に根気強く対応しようという気になるのである。

もし、歯痛が少し我慢すればおさまるのなら、歯医者にはいかないで放置する。すると、虫歯はひどくなり炎症が大きくなって広い領域へと害毒がまわることにもなる。歯痛が執拗にいつまでも続くので根負けして、歯医者に自らが行くのである。苦痛は歯の治療にと人を向ける最大の功労者になる。

病気であっても、痛みがなくなると薬を飲むのを怠りがちになる。苦痛があるならば、ひとは苦痛には気がかりをつくり、放置しがたい、無視しがたい状態にされる。その原因の損傷に注意をはらいつづけ損傷からの回復へと対応しつづける。ほかの大事件が生じれば、些細な苦痛なら背後にひきさがり、痛みは感じなくなる。だが、その大事件が解決して意識に余裕が出てくると再び痛みが浮上してくる。苦痛は、その損傷へと注目することを強要しつづける。

(覚醒価値－苦痛は、強力な覚醒作用をする)苦痛は、快のように注意など無用と眠らせるのと反対に、生の危機として意識の集中、覚醒を強いる。覚醒が必要なところでは、苦痛は「覚醒価値」をもつことができる。目覚し時計は、眠りをさそう心地よい音ではない。けたたましい不快な音である。かつては眠気が襲うことに対して冷水をあびるようなこともした。苦痛をもたらす冷水をもって強引に覚醒させた。眠りをふせぎ、覚醒を強制する非常手段として、キリで足を突くようなこともいう。苦痛は覚醒に有効な手段となる。

精神的な苦痛では、無理に覚醒させられ不眠になるのみでなく、ときに常人にはない冴えた状態になることもあるようである。苦痛は、危機的状況なのだから、その覚醒反応では、ことによると、覚醒に輪をかけて、日頃は見落としている真実の見えるようになることがあるのかも知れない。

(苦痛は、快を際立たせ、快を湧出もする)味覚では、その反価値としての苦痛(苦味や酸味)は、微量の場合、甘味などの快を「際立たせる価値」となる。しばしばその苦味や酸味は、甘味と一つになって独特の美味(快)も作り出す。あるいは、日頃は健康を快と感じることはないが、病気になると、その苦痛は、

特に回復時には、健康の快適さをしみじみと味あわせてくれる。バンジージャンプでは、安全の保証された太いゴムに結ばれて落下の恐怖感を味わい、その恐怖(苦痛)の停止の安堵状態に快感を生じる。

苦痛を快とするというと、マゾヒスト(被虐性愛者)が想起されるが、かれらは、苦痛刺激で性的快楽を得る。オスはメス強奪の死闘、メスはその余波の乱暴な扱いといった興奮を踏まえての快楽が、発情した動物の歴史であった。先祖返りなのであろうか。自傷、自虐の損傷と苦痛にも、快につながるものがあるようである。自暴自棄で、情けない自分に懲罰を加え鬱屈・鬱憤を発散させて快感を生じたり、自他からのその苦痛への慰めに安らぎの快を得るようなことがある。マラソンでは、苦痛の中でランナーズハイという快感を生じる。その苦痛を自慰するためか脳内に快楽物質が分泌される。悲しみは、喪失にいだく辛い感情であるが、そこに現実的喪失がない場合(悲劇の鑑賞など)、自慰のみが残るのであろう、甘美となり、カタルシスがもたらされる。苦痛は、ときに快を生み出す。

4．苦痛の価値論II－価値創造のための手段価値

(苦痛を手段・踏み台にして価値あるものを獲得する)忍耐は、苦痛を甘受するが、動物も、苦痛(の回避衝動)より、快への自然欲求の方が大きければ、苦痛に耐える。熊は、蜂に刺されるのを我慢しつつ(小さな苦痛)、蜂蜜を食べること(大きな快)に夢中になる。だが、動物は、苦痛が圧倒する場合とか、あるのは苦痛のみというような場合は、これを回避する。これに対して、ひとは、現にあるのは苦痛だけであっても、それを踏まえて未来に大きな目的が実現可能なら、自然感性を意志で抑止して、この苦痛を積極的に耐える。農業も畜産も、はるかな未来に豊かな生産物を描いて、延々と続く苦難の労働(手段価値)を引き受ける。前節にあげた苦痛の「情報価値」「警告価値」などでは、苦痛を求

めるものではないが、この「手段価値」においては、あえてこれを求める。ここでは苦痛が、ひとの豊かな生のための多彩な価値を創造するのである。

(苦痛が手段の場合、必ず目的実現に向かう)ひとは、目的論的に生きる。冷蔵庫を開けるのは、ビールを飲もうという目的をもってである。なぜ開けたのかが分からなくなると、目的失念ということで人間的営みができなくなっていると自覚することになる。圧倒的にひとは、日々、目的論的に動いている。

この目的のための手段を行使するとき、その手段が快である場合もある。しかし、快が手段となるときは、その快にのめり込んでしまい、目的まで進まないことがある。これに対して、その手段が苦痛の場合、苦痛は自然的には回避したいから、これを最小限にして早く済ませたいし、その苦痛の手段だけで終わると犠牲・損害のみが残るのだから、損害を防ぐためにも、その先に描く目的、価値獲得にまで到達せずには終われないということになる。嫌な事なのに苦痛を引き受けるのは、魅力的な目的があるからで、つねに目的が意識されている。苦痛が手段となっている目的論的営為は、目的まで進まなくては止まないこととなる。

(苦痛がではなく、苦痛も避けない合理的営為が価値を創造)大きな願望をもってがむしゃらに苦痛を耐えていくことがある。だが、井戸を掘る苦労とちがい、竜神に雨乞いして、飲食を絶ったり火の中に飛び込んで命をささげても願望はかなえられない。客観的に合理的に物事の道理を洞察して因果必然等をしっかりと踏まえることがいる。漠とした願望ではなく、明確な目的を未来に立てて、まず観念的に目的＝結果から因果の過程を逆に歩み、手元の原因にまで遡源して、この手元の原因から実在的な歩みを目的に向かって因果必然に沿って展開するといった、理に合った手続きが必要である。その途中には苦痛になるところが諸所にあるはずで、自然的に不快・苦痛を避ける場合、歩みはストップする。そのとき、忍耐するものは、苦痛を回避せずこれを甘受しその苦難を乗り

越え、苦痛の関所・妨害を突破して、目的まで歩みを進めていく。

(苦痛は、自他を益する価値を創造する)老人が重い荷物に難儀しているのを見て、手助けしてあげようと、その苦労を引き受けた者は、自分の苦労に価値があると自覚する。重い荷物から解放されて楽をした老人も、それを価値贈与と感謝する。価値ある目的(楽をもたらす手助け)を実現する手段としての価値ある苦痛である。

神に願い事をする者は、しばしば、お百度などの苦行、苦痛甘受の犠牲をもってするが、苦行は、苦労をもって何か創造物(供物)を作ってささげるのではない。苦痛自体をささげる。自分を鞭うち、傷つけることもした。苦痛に、神に通じる稀有の価値が見出されているのであろう。苦難を神からの試練と捉える者は、自分のその苦痛を、神に結ぶ絆・尊い手段と解して、これを稀有の価値とする。

他者に損傷を与えた償いが刑罰でなされるとき、苦痛をもってする。犯罪という反価値には、刑罰という反価値(苦痛)で報復する。その苦痛は、受刑者自体には反価値だが、被害者や国家からいうと、奪われた価値を償ってもらうのであり価値となる。刑罰の苦痛で代替的仮想的に、償うべき価値が創造されるということで罪の贖いとなるのであろう。

(苦痛は、普遍的な交換価値となる)無縁の他者と物を交換する場合は、苦労して作ったものは、だれもがその苦労に見合うものと交換したいと考えるであろう。お互いに欲しい異なった使用価値のある創造物の間で、それに同じ量の苦労・苦痛が含まれるよう計って交換は行われる。苦痛(苦労)が物の交換価値となる。各々の苦痛は、異なった使用価値をつくる異なったものであるが、交換において等値されることで等質(普遍的な交換価値)化される。苦痛は自分にしか分からず客観的評価が難しいので、(苦痛の元の)損傷によって、多くの場合労働時間という自分の時間の喪失(損傷)をもって交換価値とする。

5．苦痛の価値論Ⅲ－ひとの能力を開発する価値

(苦痛は、心身の能力を開発する)苦痛は、ひとを鍛え、その能力を高め創造する。スポーツの特訓で筋肉を傷めて筋肉痛をひきおこすことがあるが、それの回復時には、より強い筋肉が蘇る。教育は、学習者の能力を高めるために、能力ぎりぎりのところで苦労させる。難しい問題を出して、四苦八苦させて、能力を精一杯使わせる。さらには、もう一段高い能力を使わなくてはならないようにと、苦痛となるような状態にもっていくことで能力開発をする。医療の方では、身体に免疫力をつけるために、軽く病気にさせることがある。損傷を受けることで対抗的に身体に免疫力が作り上げられる。

(能力開発は、快適でありたいが、苦を回避しないことで差が出る)能力開発が反復練習でなるような場合は、かならずしも、苦痛はなくてもよかろう。むしろ、快適な練習であれば、より多く練習に打ち込めることである。だが、ときに苦痛になるような場面が生じる。そのとき、快適なもののみに限定していた場合は、その段階で練習はストップする。おそらく、苦痛になるような困難な練習に耐えて苦痛を甘受していくことがあれば、そこを乗り越えて飛躍的に能力が伸びていくのであろう。苦痛から逃げずこれに耐えていくかどうかで、能力進展の差がでる。

訓練するとき、「アメ(快)とムチ(苦)」をいう。ムチは、訓練をさぼらぬようにと脅し、罰で追い立てる。アメは、訓練にと向けるエサ、あるいは苦に耐えたときの褒美である。ただし、アメ(快)そのものは、能力の開発をしない。開発どころか、快は、まどろみ眠り込ませ、しばしば能力を退化させる。ムチ(苦痛)が能力開発を行う。すぐれた能力のための遺伝子をもっていても、その遺伝子が発現するとは限らない。ひとの尾骨のように、使わない器官は退化する。休眠中の能力を目覚めさせるには、艱難辛苦をもって刺激するのが一番である。能力の限界までこれを働かせて苦痛になるぐらいにすることで、必要に

せまられて、すぐれたその遺伝子の発現もなる。

(苦痛・辛苦は、自制心など一般的能力を養う)苦痛は、かりに特定のスポーツの特定の筋肉の鍛練としてあるとしても、この苦痛に耐えるということは、感情として心身全体での対応をするから心身全体を鍛える。何に忍耐するにしても、筋肉は特定の部位のみが強化されるとしても、苦痛の甘受は、常に心身全体で行うのである。どのスポーツであっても、否、ほかの仕事や勉強であっても、同じように苦痛(感情)には心身全体で反応して耐える。足に激痛があると逃げ出したいが、受験勉強の苦痛からも、絶望の苦痛からも、逃げ出したい。どんな苦痛も逃走衝動をもつ。それを意志力をもって抑止することはどの苦痛の忍耐でも同じである。困難への闘魂や自制心などの(自然超越の)人間的能力全般が鍛えられることになる。

「かわいい子には、旅をさせよ」という。苦労を重ねて苦痛に耐えることで自制心がつき、心身全般が鍛えられ強い存在になりうるからである。その苦労は、どんな種類のものでもよい。どの欲求抑制の苦痛も、同じ自分の意志の忍耐となる。どんな苦痛であっても、同じように心身を抑うつ状態にしたり不安や焦燥をもたらす。何であれ鍛えられておれば、その後の別の苦痛・苦難にも対応できる存在にと能力を高めることになる。もちろん、過度の受苦・受難の連続は能力を破壊する。「艱難辛苦、汝を玉にする」ではあるが、熱心過ぎる野球少年は、ときに肩を壊して野球を断念させられる。

6. 苦痛の価値論Ⅳ－人間的尊厳を証する

(苦痛の甘受は、自然超越の自由の営為である)ひとの苦痛甘受の忍耐は、苦痛回避の自然から自由になった自然超越の営為である。かりにその苦痛において、価値創造も能力開発もならないとしても、苦痛甘受の忍耐という自然超越のもとには、ひとの尊厳が証されている。

ひとは、自由に選んだ目的(＝結果)からはじめて、因果を果から因へと観念的に遡源し、この原因を手元におき実在的に作動させ手段となして、目的(結果)を実現していく。好きな目的(果)から因へと反因果の歩みをとり、自然的因果世界を踏まえつつこれを超越した自由な目的論的世界を展開する。この目的(果)の手段(因)が快の場合は、これに魅されて目的実現にまで進まず、その快享受の自然状態に埋没することがあるが、苦痛には魅されて留まることはなく、それだけでは犠牲に終わるから、かならず目的に向かう。その苦痛を忍耐は、厳かに受け止めて耐え、目的を実現する。ひとは、自然の因果を超越して目的論的に生き、快苦の自然を超越する自由な存在として、尊厳が帰されるにふさわしい存在である。

(至高の見事な支配としての尊厳)尊厳は、至高の支配者の見事な支配への、被支配者の付与する賛美の称号である。輝かしいトップ(至高)でも、ミス・ワールドやけん玉世界一には付与されず、支配者としての神や国王に尊厳が帰される所以である。尊厳は、被支配者が付与するものゆえ、会社では無能扱いの者でも、あるいは蔑ろにされた町内会長でも、家では尊厳をもつ父親でありうる。ひとは、神の前では虫けら扱いだが、卓越した自己支配・自然支配(地上で第二位の猿も、(動く)物に貶めて支配し、人類は至高を誇る)において、自画自賛ではあるが、人間の尊厳を言う。昨今は、環境を大切にしようと立派な支配をこころがけ、ひとは、真に尊厳にふさわしくなりつつある(尊厳については、広島大学図書館「学術情報リポジトリ」の拙論を参照ください(『人間の尊厳(論文集)』http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00020345)。

ひとの尊厳は、その見事な至高の支配は、支配されて支配する、従属することで支配するという自然支配の在り方に特徴がある。ひとは、自然に従う。その法則を周知しこれにしたがうことで、自然を支配してきた。その奴隷となることでその主人になった。快不快の自然にひとは従いつつ、必要に応じて、よ

りよく生きるためにこれを制御し、これをときに超越した形で、苦痛から逃げることをやめ、あえてこれを受け入れて忍耐することができる。そのことで全体として快不快の感性を理性的秩序のもとに立派に支配して、その尊厳を実現しているのである。

(ひとの厳かで尊い自己同一性を支える忍耐)ひとは、自己同一性を貫き、かけがえのない天上天下唯我独尊の厳かな実存として生きる。快不快に支配されて右往左往する動物とちがい、ひとは、苦痛(自然)から逃げず自己を保ち、艱難辛苦の自己否定を介して、より高い自己を実現していく。苦学の法学部生は、その真実の自己を、今にではなく、未来の司法官においてもつ。ひとは、未来において自己になっていくのであり、自分で自分を創造する自律自由の絶対者的な自己実現をして、立派な自己支配を貫ける尊厳の存在である。

快である場合は、その自己にとどまっていたいが、苦痛になると、自然的には、逃げだして知らぬ顔をし、先の自分と今の自分は別にしたくなる。だが、ひとは、そういうことが人間に悖ることと承知していて、マイナスを引き起こした責任をとり辛苦を背負い、過去の自分を引き受け自己同一性を貫く。かつ、自己否定を介してより高く自己実現して、その未来において、信頼にたる自己を堅持する。苦痛をも貫いてという厳しさに耐えた、尊厳をもつ不変の自己同一的人格がそこにはある。

7. 苦痛は、世界観をつくる

(世界の実在を苦痛は突きつける)何かが存在することは、それへの手ごたえで分かる。箱のなかをさぐって手ごたえがあれば、なにかが(手に対して)存在するということになる。その手ごたえ・抵抗の一番はっきりしているというか強烈なものが損傷・苦痛であろう。身体のうちでは、苦痛だけが臓器とか異物の存在を顕在化させる。苦痛は、そこに何かが厳しく実在していることを突きつ

ける。かつ、その苦痛によって自分の存在の程も自覚する。

デカルトの「我思う故に我有り」は、存在してほしいのに疑わしさのつのる自分や神を実体として確保しようとの試みであった。が、「我痛む故に我有り」では、苦痛は、存在してほしくない圧倒的な実在を押し付け、傷つきおののく自分が、安らぎにとぼしい実存であることを痛感させる(信仰者は、「我痛む」の受難に、神に選ばれたものとして「ここに我在り」(ルター)と踏ん張って誇らしく自己を確信できた)。

(功利主義の原理としての苦痛、動物の権利)功利主義では、快苦をひとの生の根本原理とみなす。快苦を感じうる存在は、ひとと同等ともみなされ、快苦を抱く動物は、人権(human rights)と同じように動物の権利(animal rights)をもつとも言われる。権利は、その者に帰属した利益を享受することの自由をうたうが、その侵害には人は苦痛をいだく。動物も、生を享受することを侵されるのは苦痛であろう。苦痛を回避したいのは、ひとも動物も同じである。動物虐待をやめ、これに生存の権利を与えるべきだと、昨今、功利主義的方面からの肉食の忌避や、動物解放の社会運動が耳目を集めている。

ひとは自然的には快を求め苦を回避する。その限りでは確かに人も動物も同じである。だが、ひとが人であるのは、この快苦の自然を超越するところに、苦痛から逃げず、快楽も抑制する理性意志の自由のもとに可能となっているのではないか。動物とひとの違いは、自然存在と、尊厳をもった超自然的自由存在との違いである。快不快で同一だから人権と同様に動物権をとの主張は、短絡的であろう。もちろん、権利は、法にうたえば、会社(法人)のように、ひとでなくても付与できる。動物のみか、植物にも、場合によっては、山河にも、その本来もっているあり方を侵害せず、(ひとであれば苦痛となる)損傷を与えず大切にすべきだと、これに権利を付与して保護することは可能ではある。

(ブラックホールとしての苦痛－苦界か楽土か)苦痛は、ひとの生を破壊して呑

み込んでいくブラックホールとなることがある。激痛が続くと、これに呑み込まれショック状態が続けば死にいたる。絶望の暗黒に引きずり込まれて奈落の底へと落とし込まれる酷虐の苦痛に呻吟するとき、ひとは、日頃は怖れる死さえも安らぎと感じる。仏教は、生病老死のこの世を「苦界」という。安穏の道は長くは続かない。苦痛・苦難のいばらが幾重にもひとを包囲している。

この世を苦界とみる仏教は、これからの脱却の道を説く。この世(色)を無と空じて「色即空」の真実に生きるなら、苦は消滅するという。「火もまた涼し」と生理的苦痛までも空ずることは容易ではないが、欲望を捨てて無苦になることはそう難しいことではない。車や銃への欲望がなく免許もなければ、その所有は快ではなく、所有しないことも不快ではない。欲望の空虚さを自覚して無欲になれば、その欲に由来する快も不快もなくなる。欲にまみれたこの穢土を空無化すれば、即この世は安楽の浄土に早変わりする。もともと備わった仏心(無欲・無心)に帰れば、苦界は、苦も快も超越して安らかな楽土になると、仏教は教える。

(附記：本誌(“HABITUS” vol.20, 21)での拙論(忍耐論)について、かみくだいたものをウェブ(http://blog.goo.ne.jp/kondoyoshiki)に展開中です。参照ください。)

On the Meaning and Worth of Pain in Perseverance

-Axiology of Pain-

Yoshiki KONDO

Emeritus professor, Hiroshima University

Although pain is an anti-value and a perfect archetype of an anti-desire object, it may have subsequent value as long as a person has the capacity to deal with it. Disgust-related pain has "information value" to inform a person about damage, and can provide "life protection value" and "prevention / warning value" against damage. Moreover, anti-value pain may have "means value", for beneficial teleological creation. Thus, a person can achieve valuable objects or goals by using pain as stepping-stone or means. By confronting anti-value pain directly, a person may achieve various values, including labor production. Thus, pain may be necessary as a means for value creation. In addition, pain can have value in the development of competency via training. Thus, experiencing pain may enable a person to train and develop their ability. Although pleasure often induces sleepiness and the degeneration of faculties, pain can cause stimulation and wakefulness. Furthermore, pain is related to human dignity. Perseverance, as the acceptance of pain, is an act of transcending nature. By mediating this pain, a person can prove the dignified character of their humanness, as the supreme ruler of their inner and outer nature. In utilitarianism, pain and pleasure are fundamental principles of human life, and feeling pain is equivalent to being human. This notion is sometimes extended to animal rights, because animals also experience pain.